世田谷文学館友の会

会 報　第６１号

２０２２年６月１日

世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南烏山 1-10-10
世田谷文学館内
FAX　03-5374-9120
ホームページ
https://setabuntomo.net/

世田谷文学館・世田谷文学館友の会共催講演
平尾隆弘氏・竹内修司氏
「さようなら安野光雅さん、半藤一利さん」

堀　伸雄

かつてこの会場でご講演をしていただいた安野光雅さん、半藤一利さんが相次いで他界されて一年余。講師の平尾隆弘さん、竹内修司さんは文藝春秋社での仕事を通じてこのお二人と長年深い親交を重ねてこられた。敬愛するお二人への追慕の念を込め、持参された思い出の書籍や絵画なども紹介されながら、多くのエピソードを語られた。来場されていた菅野昭正前館長も、旧制浦和高校時代の逸話をご披露。万全の感染対策を施した中、和気あいあいの二時間であった。ご講演の内容は実に多岐に亘る。概略になるが、当日の雰囲気を感じていただければ幸いである。

〝遊び心〟と〝いたずら心〟

安野さん、半藤さんに共通するのは、〝遊び心〟と〝いたずら心〟。構えたところのない、懐の深さである。安野さんは、見たものを写実として描くだけではなく、見えないものを描いた。『旅の絵本』のどの絵にも三角帽子の旅人が描かれている。読者にはそれを探す楽しみが。半藤さんは、作家・井上ひさしの言葉「むずかしいことをやさしく　やさしいことをふかく　ふかいことをおもしろく　おもしろいことをまじめに　まじめなことをゆかいに　そしてゆかいなことはあくまでもゆかいに」が座右の銘。常にこの名言の実現を目指されていた。

講演者　平尾隆弘氏（左）、竹内修司氏

２０２２年２月６日　於：世田谷文学館

【安野光雅さん】

■シルクロードへの三人の旅

一九八五年、文藝春秋出版局に勤務されていた竹内さんは、安野さんと作家・澤地久枝さんのシルクロードの三週間の旅に同行。道中、三人でこの旅の雰囲気を漢詩連句で詠もうということになった。漢字五文字で一人二行、三人で順繰りに詠んだ。韻などのルールは無視、ひたすらシルクロードの雰囲気を出そうという趣向。安野さんは、更にこの漢詩を、『荒城の月』『草津節』などの日本の歌に翻案。連句冒頭の「敦煌夜半鐘　洞窟嘆飛天　吹風清且涼　欲忘回憶新」は、『荒城の月』をもじって「春敦煌の夜半の鐘　莫高窟に泣く　天女　老うる陽樹に吹く風や　昔の仏、今何処」という具合。

■見えないものを描く

平尾さんは、安野さんに同行して津和野美術館を訪問した際、安野さんが描いた青野山のスケッチに驚いた。描かれた青野山は、稜線や雲の形などが実景と異なる。ないはずの樹が生えている。しかし、青野山よりもはるかに青野山らしい風景だった。絵を描くスピードも猛烈に早い。安野さんは、描こうとする絵のイメージが寸時に心に浮かぶからだ。ある時は、童話の学校の「蝦蟇（がま）高等学校」のために校歌と校章まで考えた。また、ある年は、「小金井刑務所」からのいたずら年賀状を。刑期満了による出所後の更生を誓う文面で、精巧に彫られた検閲印まで押してあり、大騒動になったという。

■青海波の装幀

『戦艦大和ノ最期』の著者・吉田満氏の遺稿集『戦中派の死生観』が刊行される際、担当の平尾さんは、装幀を安野さんに依頼。羊皮紙を使って青海波を描きたいというのが安野さんのご希望。コストアップにはなるが上司の竹内さん、半藤さんは快諾。安野さんは青海波を見事に手書きで描かれた。澤地久枝さんのエッセイ集『ぬくもりのある旅』の装幀画も安野さん。原画は澤地さんのご自宅の玄関にも飾られている。安野さんのブックデザインは、画家の余技ではなく創意工夫に富んだ「作品」だった。

【半藤一利さん】

■半藤さんの原体験と二人の人物との出会い

半藤さんの生き方を決定づけたのは、東京大空襲の被災体験と伊藤正徳、坂口安吾との出会い。昭和二十年三月の大空襲で焼け出され、辛くも隅田川で助けられた少年時代の体験は、昭和史に飛び込む最大の動機となる。昭和二八年入社の半藤さんは、軍事記者の伊藤正徳のアシスタントとして資料収集などに奔走、幅広く各層の人々の戦争体験を聞いた。また、入社後間もない頃、群馬の坂口安吾宅を訪問。受け取るべき原稿は書かれておらず、結局一週間泊まり込む羽目に。酒の相手をしながら、安吾から歴史の神髄をとくと聞かされた。「資料に頼ってはだめだ、資料の裏にいる人間を描かねばだめだ」と。

〝歴史探偵〟は安吾の自称だった。平尾さんによれば、安吾は気風の良さ、面倒見の良さ、右顧左眄しないこと等々の点で、半藤さんの父・末松に似ている。安吾に対し「第二の父」という気持ちを抱いていたのかもしれない。

■専門家とは異なる味付けの著書

半藤さんは東大では国文科出身である。一種のアマチュアリズムの「歴史探偵」を標榜し、結局二百数冊の本を書いた。うち八十冊は六五歳を過ぎてから。最初は個別的事件、だんだん視野が広がり、八五歳から世界史の勉強を始め、『世界史の中の昭和史』に結実した。その著書は、歴史の専門家とは異なる味付けがされており、どこかに遊びがある。下町育ちだから永井荷風が大好きで、お座敷芸はお手のもの。版画、短歌、俳句、日本舞踊など多才。東西統一直後にドイツへ旅行した折には、ブランデンブルク門の前で謡曲『八島』を舞った。

■文藝春秋読者賞

半藤さんの編集長としての仕事で注目したいのは、第四十一回文藝春秋読者賞（一九七九年）の贈呈。澤地久枝さん『昭和史のおんな』と、森嶋通夫（経済学者）と関嘉彦（社会思想史家）との論争『大論争・戦争と平和』に対する贈呈で、特に、ソフトウエアによる防衛論を展開する森嶋に注目、今も揺れ動く憲法九条問題に脚光を当てたことである。

■伝えたい五つの教訓

昭和史研究の同志ともいえる保阪正康氏は、その著書『半藤一利・語りつくした戦争と平和』の中で、半藤さんの五つの教訓を紹介している。①国民的熱狂をつくるな（言論・出版の自由こそが生命）、②観念論に警戒し、リアリズムに徹せよ、③日本型タコツボ（エリート小集団主義）の弊害に心せよ、④国際的常識の欠如に気を配れ、⑤ロンググレンジのものの見方を心がけよ。竹内さんは、これからの日本を考える上での重要な指針であることを強調された。

この講演後、世界は再び戦禍に見舞われている。国境を越えた平和な旅人を描き続けた安野さん、非戦の思想家・墨子を読むべしと説かれた半藤さん、お二人が残された大切な遺産を、今回、間近におられた平尾さん、竹内さんが語り伝えていただいた意義は大きい。

（友の会会員）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二〇二二年度友の会総会及び記念講演開催

二〇二二年度世田谷文学館友の会総会が四月三日（日）午後一時半から文学館一階文学サロンで三年ぶりに開催された。冒頭、昨年度新会長に就任した平尾隆弘氏の挨拶、続いて同じく昨年度文学館館長に就任された亀山郁夫氏の来賓挨拶を賜る。平尾会長が総会議長に任命され議事審議へ。総会抄録並びに議決資料は本号に同封あり。総会出席者は八八名。

引き続き、午後二時半より文学館との共催記念講演、阿川佐和子氏（作家・エッセイスト）による「ファザコンからの脱却 ——父・阿川弘之の生誕１００年を迎えて」を開催。一般参加者（約半数が当日ご入会）を含む総勢一四〇余名のご来場を得て盛会裡に終えた。

率直に、歯切れよくお父上の思い出をお話しされる
阿川佐和子氏
於：世田谷文学館

世田谷文学館
友の会　会長
平尾隆弘氏
総会挨拶

世田谷文学館
館長
亀山郁夫氏
来賓挨拶（左）

シリーズ　世田谷とわたし　第十三回

〝物語の運転士〟

吉田　篤弘

神田で生まれた父が、なぜ、世田谷にアパートを借りて新婚生活を始めたのか知らない。世田谷線の山下駅から歩いて一分とかからないところだった。アパートの前に立つと、二両編成の世田谷線がのんびりと行き交っているのが、すぐそこに見える。

そんなところで生まれ育ったので、物ごころがついた頃には、世田谷線の「運転士になりたい」と口にしていた。最初は、ごく単純に電車を運転することへの憧れがあったのだと思う。運転士になった自分を思い浮かべ、時刻表どおりにきちんと運行するところまで律義に空想していた。

小学五年生になった頃、この憧れは微妙な変化を遂げて、その対象が世田谷線からバスの運転士へと移り変わった。しかも、頭の中の空想にとどまらず、実践をともなうようになっていた。

具体的に言うと、近所にあったゆるい坂道をバスの路線に見立て、坂の上から坂下まで、およそ五百メートルほどの距離を自転車で往き来した。坂の途中に、いくつかの停車ポイント――架空のバス停である――を定め、その場所に着くたび、しばらく自転車を停めてじっとしていた。

このとき、頭の中に展開されていたのは乗客の乗り降りで、世田谷線やバスで見聞きした記憶を重ねて、乗客のひとりひとりが運賃箱に小銭を投入する様子や、重い荷物を抱えてゆっくり乗り降りする様を思い描いていた。つまり、当初は運転する喜びに憧れていたのだけれど、いつからか、乗客を送り届けることに意義を感じていた。

他愛ない運転士ごっこではあったけれど、この移り変わりは見過ごせない。世田谷線の線路のすぐそばで生まれ育ったことが自分を形づくっていった。

じつは、小田急線もすぐそばを走っていたのだが、「世田谷線がいい」という思いが常にあった。そこには、運転士と乗客の距離――その近さが影響していたと思う。こぢんまりとした車内で、運転士と乗客は同じ空間を共にし、運転士はその背中で乗客の動向を読みとっていた。これはバスも同じで、乗客に合わせて、ドアの開閉をしたり、出発のタイミングを見はからったりしている。

おだやかに走る小さな乗りもので、わずかな時間ながら、ひとつの空間を共有してどこかへ向かっていた。どこかに運ばれていた。

憧れていたものの、結局、運転士にはならず、いまは小説を書く仕事をしている。世田谷線は変わらず二両編成で走り、踏み切りからその車両を見送りながら、ふと思った。

小説を書いて、それが本になる。読者がページをひらき、言葉と物語によって、どこかへ運ばれていく。運んでいくのが自分の仕事で、いつのまにか自分は物語の運転士になっていた。

架空のバス停に停車し、じっと息をひそめていたのを思い出す。乗客のひとりひとりの息づかいを背中の目で追っていたのを思い出す。

（作家）

作家紹介　1962年、世田谷区赤堤生まれ。著書に『つむじ風食堂の夜』『それからはスープのことばかり考えて暮らした』『流星シネマ』『月とコーヒー』など。世田谷区在住。

ヨソの文学館・記念館

【早稲田大学国際文学館・村上春樹ライブラリー】

映画「ドライブ・マイ・カー」が今年の米国アカデミー賞「国際長編映画賞」を受賞。原作者の村上春樹は常に時の人。昨年十月早稲田大学内に隈研吾の設計で村上春樹ライブラリーが新設された。

正面玄関を入るとトンネルをイメージしたという左右に本棚のある大階段に吸い込まれていく。一段ずつの幅も広く座って本が読めるのだが、展示してある本に気を取られて滑り落ちそうになる。

地階の左手には村上春樹の書斎が再現されている。村上の書斎はあちらこちらにあり、大磯の書斎に一番近いとか。「筆者近影」と記された自筆の猫顔のイラストがキュート。書斎を囲む飲食スペースは自由に出入りができ、学生たちが運営しているカフェ「オレンジキャット」も併設されている。

二階に上がると、同館のリノベーション過程の展示があり、隈の村上への思いも綴られていた。

一階に戻り、壁に村上春樹の年表と、これも隈研吾デザインのコクーンチェアが四つあり、思わず籠って読書したくなる。書籍ルームの壁際には村上の全著作、翻訳した本、世界各国の言葉で翻訳された村上の本が並び、自由に手に取って、真ん中の長いテーブルに座って読むこともできる。ここで改めて村上春樹は日本では珍しく共に同時代を語ることのできる作家であることに気づく。そしてここが「早稲田大学〈国際〉文学館」であることも。

所在地　東京都新宿区西早稲田一―六―一
電　話　〇三―三二〇四―四六一四
入館料　無料（要事前予約）

（友の会会員　坂田美代子）

講座「柳田國男『遠野物語』を読む」に参加して

溝渕　有子

若い頃に『遠野物語』にあこがれて、どうあこがれたのかはすっかり忘れていますが、花巻と遠野を旅したことがありました。遠野の青い山並と、歩いて行ったカッパの淵をかすかに思い出すくらい昔のことです。

平出洸先生は、はじめに東北地方と岩手県の地図を示されて、岩手県は日本で北海道の次に広い県と話されました。

遠野郷は、後日読んだ『遠野物語 remix』で、土淵（つちぶち）・附馬牛（つくもうし）・松崎・青笹・上郷（かみごう）・小友（おとも）・綾織（あやおり）・鱒沢（ますざわ）・宮守（みやもり）・達曽部（たつそべ）の十ヶ村と遠野町よりなると書かれており、上閉伊郡（かみへいぐん）の西半分です。深く険しい山々に囲まれた、平らかな土地が広がる盆地と知りました。

平出先生のお話によると、『遠野物語』の立役者その一は柳田國男、日本民俗学の創始者です。立役者その二は佐々木喜善、岩手県遠野郷土淵出身で、祖父が語り部、遠野の民話の収集者です。立役者その三は水野葉舟（ようしゅう）、東京で柳田國男と佐々木喜善を引き合わせた詩人です。先生の立役者という紹介のしかたは、はなはだ愉快だったことに加え、三人の人物にはひと言ではいい表せない経歴があって、もっと詳しく知りたい方々だと思いました。

当日の資料で紹介された『遠野物語』は、河童の話四編、ザシキワラシの話二編、サムトの話一編、神女の話一編、猿の経立（ふったち）の話二編、山女の話六編でした。山女の話六編の中の狂女トヨは、資料「佐々木喜善の系譜」にあるとおり、喜善の大叔母にあたり、『遠野物語』の話し手である佐々木喜善は、まさに、『遠野物語』の中で生まれ育った人であったことがわかりました。『遠野物語』にある話は、しんとした不思議なひびきがあって、不気味で恐ろしい話が多いと感じました。それが、柳田國男の著した『遠野物語』のおもしろさかもしれません。

森ゆり子さんの朗読は歯切れのよい静かな語り口で、『遠野物語』の景色が心にしみるものでした。

私は土佐の田舎で育ち、子どもの頃は「子とりがくる」「橋の下は気をつけよ」「夕暮れには出歩くな」などと言われたものですが、『遠野物語』に通じる思いがしました。

遠野市観光協会発行の「カッパ捕獲許可証」を何と平尾会長直々に四枚程取り寄せてくださったとユニークなお知らせがあり、おもしろがった先着四名の一人となって一枚頂戴しました。有効期限は一年とありましたが、コロナウイルスの影響で配慮ありとの吉報も得ましたので、近々また遠野を旅してみたいと思っています。

（友の会会員）

講師　平出 洸 氏
２０２１年１１月１６日
於：世田谷文学館

文学散歩「三軒茶屋界隈に暮らした流離（さすらい）人（びと）の文人たち」に参加して

板谷　直美

鄙（ひな）びた地名と、種々雑多な商店がひしめく様子が何やら懐かしく、三軒茶屋はかねてより心惹かれる町でした。その三軒茶屋駅から徒歩１㎞圏内に、これほど見所が詰まっているとは驚きました。

町散歩の魅力は、見慣れた風景の中からふいに異境が立ち顕れる瞬間にあります。町並みは古いほどに路地は狭いほどに、魔や異形のもの、亡き人や失われた時代に出会えそうな気がいたします。そんな時、文学作品はイメージにさらに力を与えてくれるものです。

山田風太郎旧居跡では、四十年もの昔に読んだ短編『さようなら』が蘇りました。小さな町の一画を舞台にした哀切なミステリーです。あとで調べてみると昭和三十一年発表の作品ですから、当時居住していた三軒茶屋が、作中の町と考えたいところです。今回の案内者であり旧居を調査発掘した作家きむらけん氏が語る、近隣との和やかなエピソードに昭和の暮らしが活き活きと偲ばれました。

佐藤愛子邸は、重厚な門構えが主人の佇まいを彷彿とさせます。佐藤先生の心霊エッセイを愛読しているせいか、異界へも通ずる門扉に思えました。元帥陸軍大将畑俊六旧居跡にて、ご参加の方から貴重なる在りし日の交流秘話を伺えたことは、ライブ体験ならではの妙味でありました。寡聞にして初耳の永井叔（よし）でしたが、その交友から中原中也、長谷川泰子の名前が挙げられると、詩集に親しんだ十代の頃に戻るようでした。

散歩後半の見所は林芙美子旧居跡と円泉寺です。林芙美子といえば、『骨』の凍てつくような泥沼が思い起こされるのです。舞台『放浪記』を観たのは十余年前で、実際の場面は覚えているはずもないのに、第四幕世田谷の家の書き割り上手に、円泉寺の屋根の緑青と銀杏の黄金が描き込まれていたような気がしてきます。

きむら氏の「都鄙境（とひさかい）」というキーワードから、海の潮目に様々な魚類が集まる現象が連想されました。うららかな初冬の昼下がり、わずか三時間の行程とは思えない濃密な時空旅行でした。企画実行に携われた皆様に心より御礼申し上げます。（友の会会員）

案内人・きむらけん氏、永井叔著『大空さん自叙伝』（大空の家、1965～1970）はすべて謄写版だったという現物を披露。手作りの風合いがあった。太子堂５丁目、永井旧居兼印刷所跡にて。　（撮影 2021.12.4）

秋から冬へ、そして新春の文学散歩に参加して
―隅田川を越えて―

今本　孝子

数年前、「世田谷文学館友の会」の皆様を墨田区向島にお迎えしたご縁で友の会の存在を知り、昨年入会させていただいた。

初めて参加した十月の成城散歩。結婚後三年間ほど砧公園近くに住んでいたこともあり、期待と不安を抱いて見紛う程の成城学園前駅に四十年振りに降り立った。当時利用していた改札口は反対側だが成城石井は記憶通りに在った。

がそこから先は未知のフィールド。殆どは邸宅跡だが印象的だったのは大江健三郎邸。生垣は草木が生い茂り、たまたま造園業者が作業中だったせいか生気に満ち溢れているように見えた。

十二月の三軒茶屋散歩の道の始めは大山道標。坂の名前が一つしかない平坦な川向うから来た私には地形からの説明はブラ・タモリのようで興味深い。駅近くに住むという学生時代の友人に再会というオマケまでついた。秋晴れの成城散歩とは異なり、師走の三軒茶屋は名残の紅葉が北風に輝いていた。太子堂の林芙美子寓居跡に来た頃には早い日暮れの気配が漂い、当時の芙美子の心境に思いを馳せた。「林芙美子に会ってみたかった」気持ちが急にわいてきた。（その後を見届けなければ……）一月の落合散歩も外せない。

落合文士村周辺散歩の集合場所「せせらぎの里」には一年のスタートに相応しく初春の陽光が降り注いでいた。念願の中井の林芙美子新居跡（現新宿区立林芙美子記念館）は解散後の自由見学。夫の転勤で広島に住んでいた時、尾道の旧居跡を訪ねた記憶が蘇った。芙美子の成功の賜物である新居を保存し公開し続ける行政の懐の深さを感じながら閉館近くまで堪能させていただいた。裏庭にあったという茶室を書斎から廊下越しに眺める上部は小堀遠州の孤篷庵「忘筌（ぼうせん）」を思わせる造作となっている。寝室の手焙も姿良い。

花のいのちはみじかくて
苦しきことのみ多かりき

道半ばであったが後半は喜びの多い人生だったろうと安堵した。

テレビもスマホもない時代、「話したい」「交流を深めたい」相手と会うために近所に住むことを選択した文人達。歩きながらスタッフの方が「コロナ感染に怯えて家に居るのと新鮮な外気にふれ散歩をするのとどちらが良いかしら」と誰にともなく何気なく言われた。幾度となくコースの下見を重ね、緻密な資料を作成して、豊富な知識で懇切丁寧に案内解説して下さる講師、スタッフの方々に感謝しつつ、今後も後者希望と心のうちで答えた。

（友の会会員）

中井２丁目、吉屋信子旧居跡前で。大正１５年春、一躍、文壇の注目を集める存在となった吉屋は四ノ坂と五ノ坂の間の日の当たる高台にバンガロー風の邸宅を建てた。　（撮影 2022.1.23）

随筆

「横ざまなる」と「かへりてはつらくなむ」

―― 上野英二先生の「源氏物語と長恨歌」をお聴きして ――

糸井　久

上野英二先生の講座二回目(昨年九月十七日)は、台風十四号接近の予報で、御講義の終りの質問時間を削って慌しく終えてしまいました。進行役の私は、何か大切なお話が残ったような感じがあったので御講座の終った後にお尋ねしました。

いただいた講義資料に帝の使者靫負命婦(ゆげいのみょうぶ)が亡き桐壺更衣の里邸を弔問する場面があります。老母は帝のことばを伝えられ、帝の手紙を読み高まる心を抑えかねて、「(娘更衣ノ死ハ) 横様なるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ。かしこき御心ざしを思うたまへられはべる。」と命婦に訴えます。「横様なる (死)」の語は、「横死＝非業の死。尋常ではない死」の意で、厳しく強く響く語で、長恨歌にも平安時代の物語にもない語です。身分低い老女が激越な語を発し、さらに娘の死は帝の深い愛情によるのだと逆恨みの思いを述べている。このような場面は中国古代の歴史書の中にあるのでしょうかとお尋ねしました。

上野先生は「この語やこのような場面は中国古代の史書に見当りません。これこそ紫式部のオリジナルです。実は話の最後にこの場面を取上げて結びにしたいと思っていました。」と答えられました。私は台風襲来でといってもお話を早く切り上げたことを今も後悔しています。

先生の御講義を私がお聴きして思いついたことを記しておきます。①桐壺帝には玄宗皇帝のような美人を広く探し求め、ついに楊貴妃を手にし、宮中で溺愛する驕慢な帝王のイメージがない。②帝と更衣の心の結びつきは、前世からの縁(えにし)かと感じられる精神的な強さ深さがあると強調されている。③帝の心は権門出身ではない女性の心と強く結ばれて、他の后達を顧みていない。それは帝として摂関政治下で外戚政治を建前とする宮廷の慣例や掟に背くことになる。④老母は帝の深い愛情を理解しながら、それでも娘の死の原因は帝の愛情によると訴えている。作者は逆恨みの語により親の〈心の闇〉をみごとに表現している。

桐壺巻後半には長恨歌の神仙境訪問がなく、地上の人々の死者への哀傷、母の死により宮廷社会で孤児となった若宮への父帝の父性愛と続く。紫式部は長恨歌の世界を借りつつ、現実の宮廷の露わな人間関係を物語の中心に置いています。　(友の会会員)

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

わたしの一冊

『52ヘルツのクジラたち』

著者　町田そのこ

中央公論新社

２０２０年刊行

坪内　園子

昨年から今年にかけて町田そのこの作品を最新作『星を掬う』まで何冊か読んだ。内容が深刻で衝撃を受けたのが『52ヘルツのクジラたち』だ。主人公の三島貴湖（みしまきこ）は二十代女性、亡き祖母が晩年を過ごした大分の漁村の家をリフォームして暮らし始め、周囲の好奇の目にさらされる。

貴湖が偶然出会った子供は虐待を受けているらしいが口が利けず、心を開かない。二人の距離が少しずつ縮まってくると共に、貴湖も虐待や恋人との関係で地獄のような年月を過ごしてきたことが読者にもわかってくる。心が凍えるような絶望的な孤独。貴湖が助けを求めて心の中で呼びかける「アンさん」も孤独の中で他の人には聞こえない声をあげていたのだ、仲間のクジラには聞き取れない52ヘルツで歌うクジラのように。

児童虐待は小説の中の作り話ではない。現実にこの社会で起きていることだ。報道される記事のあまりのむごさに目を背けてしまうが事件となるのは氷山の一角、一人ぼっちで苦しんでいる子供たちが大勢いる。大人社会の歪みが無抵抗な心や身体を傷めつけている。虐待だけでなくヤングケアラー、トランスジェンダー、助けを求めることもできず孤独の中でもがき苦しんでいる人達の、声にならない叫びがひりひりと伝わってくる。

作者は携帯で小説を書き始めたらしい。原稿用紙は敷居が高いと感じる世代からも、発信できる世の中になっている。立場の違う人の声も聞き取れる想像力を持ちたいと思う。

(友の会会員)

世田谷区民ではないけれど……〝消えゆく戦争の記憶の中で〟
～千葉県より～

細貝　あけみ

蘆花公園駅を降り静かな街並をのんびりと歩いて行くと、やがて緑の木々に囲まれた文学館の姿が、市街の喧騒から切り離され、時を遡ったようなひっそりとした佇まいに、期待で胸がワクワクします。

私が生まれ育った千葉県市川市は古くは万葉集にも詠われている緑豊かな由緒ある都市です。今ではすっかりと近代化され便利になりましたが、私の子どもの頃にはまだ街の至る所に昔の面影が残っていました。戦後生まれの私にも、戦争の痕跡が残っている街の中で大人たちの苦労話を聞き、電車の中では傷痍軍人の白い着物姿を見つめ、都会に出ると浮浪者、浮浪児の姿、そして米軍のジープが街を駆っているのを見ました。満州から引き揚げて来た私の父母兄の住まいは、床は傾き、トイレも共同、台所さえないオンボロの間借りした部屋でした。日本中が貧しく、懸命に生きていた時代、でも何もなくても心が満たされ、幸せな子ども時代でした。

ところが今、戦後七十七年も過ぎ何一つ不自由なもの等ないのに何故か心が満たされないのです。私たちは何か大切なものを忘れてきてしまったのでは？

そんな時に文学館・友の会共催講演、金子兜太氏の〝体で生きてきた〟と出会ったのです。氏はアジア太平洋戦争の中、トラック島での戦争体験、沢山の友人たちの死を見てきて自分は生き残ってここにいる、自分自身で何が出来るのか、戦争を語り継ぐことが自分の使命ではないのかと思い今まで生きてきた。また始めた立禅で無念の死を遂げたひとりひとりの名前を唱え心に刻んでいる、すると気持ちも落ち着き死んだ友人たちも慰められるのでは、と。兜太氏の戦争に対する憤りが伝わり、胸が一杯になりました。そうだ私も今まで不条理に虐げられ生命を奪われてきた名も無き人々の為に祈ろう、忘れない為に記憶の片隅にとどめて行こうと決意してきました。今私の手元には兜太氏の黒々と墨で書かれたプラカードがあります。そのプラカードを掲げ、九十歳を越えた今でも国会の前に立つ澤地久枝さん、その姿は凛として、私たちの先頭にいられます。アベ政治を許さない、もう二度と戦争の惨禍に子どもたちを晒さない、との願いを込めて立ち続けているのです。

そんな出会いをさせていただいた世田谷文学館友の会、これからも素敵な出会いに期待しています。

（友の会会員）

三六回（二〇二一年度）世田谷文学賞入賞

二〇二一年九月に実施された第三六回世田谷文学賞の入賞者の発表が十二月にありました。世田谷文学賞は、世田谷文学館が、短歌、俳句、川柳、詩、随筆の部門で隔年募集しています。応募資格者は、世田谷区内在住、在勤、在学の人、および世田谷文学館友の会会員です。

友の会会員の入賞者は、詩部門一席に土屋春美さん、同じく三席に辻本純美子さん、川柳部門二席に斉田裕子さん、同じく三席に森沙恵子さんです。皆さん、ご入賞おめでとうございます。入賞者の作品は文学館ホームページに掲載されています。ここでは詩部門一席の土屋さんの作品（次ページに続く）をご紹介します。

季節が溶け始めたとき

詩部門［一席］　土屋　春美

思い出の色を拾うために
人気のない冬の公園を歩いてみた

公園にあったのは
雪の白と枯れ木と土の無彩色ばかり
無彩色の世界は
こころを凍らせる

さくさくと
降ったばかりの雪を踏みしめ
思い出の声が
聞こえないかと
耳を澄ます

小鳥の声が聞こえた気がして
見上げると
枯れた木の枝の先に
ナナカマドが一房だけ
実をつけていた
ゆうやけ空を見る瞳のような
色だった

思い出のしずくなのか
目の前を氷の粒が光り
流れていった

何も知らない頃の無垢な思いが
踏みしめる雪の下に
埋もれていないかと　目をこらす

誰かが落とした　悲しみのかけらは
もうとっくのまに
ダイヤモンドダストになって
飛んでいったか

思い出の色をさがし
冬の公園を歩いてみた

誰ものらぬブランコが
ふとゆれて　風が変わった
世界がすこしだけ
色づいた気がした

ブランコには
過ぎた日々の
春や夏や秋の風の色が見えた
白と灰色ばかりの世界に
少しだけ色が付いた
そんな気がした

冬の公園に
思い出の色を見つけ
すこしだけ
ほんのすこしだけ
季節が溶け始めた

（友の会会員）

〜〜

こういう催しがありました〜（２０２１年１１月〜２０２２年３月）

月　日	講演・講座・散歩	講師・案内人
2021 年 11 月 16 日	講座　柳田國男『遠野物語』を読む	平出　洸 氏（友の会前会長） 朗読　森　ゆり子氏（友の会編集委員）
12 月 3 日 12 月 4 日	納めの散歩　三軒茶屋界隈に暮らした流離い人（さすらいびと）の文人たち 〜山田風太郎・永井 叔（よし）・三好達治・林芙美子、そして今秋９８歳の佐藤愛子〜	きむら　けん氏 （文化探査者・作家）
2022 年 1 月 21 日 1 月 23 日	新春散歩　落合文士村周辺を訪ねる 〜プロレタリア文学者から尾崎一雄、壇一雄、尾崎翠、林芙美子まで〜	松山　信洋氏（文学遺跡探査者）
2 月 6 日	世田谷文学館・友の会共催講演 さようなら安野光雅さん、半藤一利さん	平尾　隆弘氏（元文藝春秋社） 竹内　修司氏（元文藝春秋社）

エッセー「わたしの一冊」の原稿募集中！

・タイトルに本の題名（著者名・出版社名・出版年も）明記
・あなたのお名前、連絡先を明記
・字数は六〇〇字以内（厳守）
・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
・原稿はお返ししません
・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります

編集後記

藤の花の香が風に乗り清々しさを感じる季節を迎えました。
昨年七月から友の会はコロナの第五波、六波の間隙を縫い、講座や文学散歩、そしてこの四月には三年ぶりの総会・講演と無事に開催できましたのは皆さまのご協力の賜物と深く感謝しています。ありがとうございます。
一方、それに加え思いもかけぬロシアとウクライナの戦争、世界の根底を揺るがすことがいとも易々と起きたことにショックが拭えません。堀氏の会報巻頭文の末尾に書かれた「国境を越えた平和な旅人を描き続けた安野さん、半藤さん、非戦の思想家墨子を読むべしと説かれた半藤さん、……」という言が深く心に食い入ります。

森　ゆり子